

(資料)

REFRANERO ESPANOL (24)

スペインの諺辞典

Bernardo Villasanz*

新 井 藍 子**

N

1015. Nace en la huerta lo que el hortelano no siembra.

農夫が 蒔かなかった作物が 畑に芽を出す

- 計画の段階では、予想もつかなかった出来事がしばしばビジネスとかその他の事柄に起こるものである。(バロス) 良い教育を与えたにもかかわらず悪い習慣を身につけた者をたとえて言う。(スバルビィ)
- コレアス諺集には異表現で “Nace en el güerto lo que no siembra el dueño. ” , “Nace en la güerta lo que no sembró el hortelano. ” , “Nace en la güerta la que el hortelano no siembra. ” などが収載されている。いずれも訳は標題のことわざと同じで, güerto, güerta は, huerto, huerta の古語で野菜畑, 農園の意味。
- 思いもしていなかった不測の出来事が生じた時に用いられることわざであろう。こういう事態はわれわれが日常生活を営んでいる時にしばしば経験するので親近感がある。

* Edición y revisión. Facultad de Humanidades. Universidad de Fukuoka.

** Profesora de español en la Universidad de Fukuoka (Facultad de Humanidades).

1016. Nacen alas a la hormiga para que se pierda más aína.

すばやく 消えうせるように 蟻に羽が生える

- できる限り努力して手に入れた利益が、かえって人に害を与えるようなことがしばしばあるということ。(パロス)
- 異表現がコレアス諺集に “Nacieron alas a la hormiga para su daño. 蟻に害を与えるために羽が生えた”，また，スバルビィ諺集には “Nacen alas a la hormiga para que se pierda más aína. ”，“Por su mal le nacieron alas a la hormiga. 蟻の不運のために羽が生えた”，“Cuando las hormigas se quieren perder, alas les han de nacer. 蟻が消え去りたい時には，羽が生えるにちがいない”，“Da Dios alas a la hormiga para que muera más aína, o por su mal supo la hormiga volar. 神は蟻が早く死ぬように羽を授ける，蟻は己の禍いのために飛ぶことを学んだ”などが収載されている。スバルビィによると，この羽蟻は上に昇れば昇るほど死を招きやすい。“aína”は，“pronto- 早く，すばやく，急いで”の意。
- コバルビアスの宝典によると，実際にある種の蟻は消えうせるために羽が生えるらしい。おもしろい自然の現象である，それがこの諺の根拠となっている。
- 例題1：ドン・キホーテ第二部33章，公爵の奥方様がわしに島の統治をさせたくないと思うのもわしの良心にとってはためになるかもしれない，とサンチョの返答はまことに賢い，“…；que maguera tonto, se me entiende aquel refrán de <Por su mal le nacieron alas a la hormiga>；y aun podría ser que se fuese más aína Sancho escudero al cielo, que no Sancho gobernador. わしゃおろか者でもね，<蟻の羽が生えたでふしあわせ>ってあのことわざを呑みこんでるだ。それに，従士サンチョの方が太守サンチョよりも，天国へらくに行けるってことさえあるかもしれねえでがす。”（続編二，永田寛定訳）
- 例題2：ドン・キホーテ第二部53章，サンチョは，治世七日目にして太守の仕事にうんざりしていた，むかしの気ままな暮らしがしたい，また足裏を地べたにつけて，歩きたいとことわざをたくさん並べて言う，“Quédense en esta caballeriza las alas de la hormiga, que me levantaron en el aire para que me comiesen vencejos y otros pájaros, y… 蟻の羽めがこのわしを，燕や小鳥の餌じきにしようとして，空中高く舞いあがらせた。その羽めをばこの馬小屋に，きれえさっぱり脱ぎ捨てて，…”（続

編三、高橋正武訳) 註 84: 蟻の羽とは、高望み、野心の象徴。<Por su mal nacieron alas a las hormigas. 羽が生えたて蟻ふしあわせ>という格言がある。蟻が神さまにお願いして羽を生やしてもらい、空を飛んだばかりに、小鳥の餌になって、命をちぢめたという話。

1017. Nace toda criatura, según se dice, con su ventura.

あらゆる生きものは 生まれた時に 運が決まっているらしい

- そう言う者もいるし、自分の運は自分で切り開くものであるという者もいる。人の運は天命によって定まっているものだから、人の力では変えられるものではないという“運は天にあり”が標題のことわざにぴったり同じである。類義では“運否天賦”，“運を天に任せる”，“命は天にあり”（史記）などがある。これらの反対のことわざは、さしずめ“生まれながら貴き者なし”，“生まれながらの長老なし”（長老とは、経験を積んだ学識や人格の高い人の意—故事，ことわざ活用辞典）などであろうか。

1018. Nada puede la fortuna contra el sabio.

財宝は 賢者には 刃が立たぬ

- 賢者にとっては、最高の、尽きることのない財宝である知恵を手に入れているので富など何の値打ちもない。財宝に対する知恵の尊さを“旧約聖書，知恵の書—知恵の値打ち”では次のように謳っている；

La preferí a los cetros y los tronos;	わたしは知恵を王笏や王座よりも尊び、
en comparación con ella,	知恵に比べれば、
tuve en nada la riqueza.	富も無に等しいと思った。
Ninguna piedra preciosa me	どんな宝石も知恵にまさるとは
pareció igual a ella,	思わなかった。
pues frente a ella todo el oro	知恵の前では金も
como un puñado de arena,	砂粒にすぎず、
y la plata vale tanto como el barro.	知恵と比べれば銀も泥に等しい。(7-8-10)

Con ella me vinieron a la vez 知恵と共にすべての善が、

todos los bienes, わたしを訪れた。
 pues me trajo incalculables riquezas; 知恵の手の中には量り難い富がある。(7-11-12)

 no escondo para mí su riqueza わたしは知恵の富を隠すことはしない。
 La sabiduría es para los hombres 知恵は人間にとって無尽蔵の宝、(7-13-14)
 un tesoro inagotable:

- 上記の“知恵の値打ち”からの引用箇所を見てわかるように、スペインの標題のことわざがどこから来たかは一目瞭然である。知恵そのものが、人間にとって無尽蔵の宝であるから、富などは無に等しい。しかしこう言えるのも知恵を手に入れた者だけで、凡人にとっては“人間万事金の世の中”，“地獄の沙汰も金次第”，“仏の光より金の光”などの日本のことわざに共感を覚えるのではないだろうか。

1019. Nadar y nadar y a la orilla ahogar.

泳いで 泳いで 岸近くで 溺れる

- 非常に苦労した後で失敗すること。(バロス) 何かを手に入れようとして一生懸命になった者が、もう大丈夫と考えたやさきにそれが駄目になってしまった時、或いは、治りそうだという期待を抱いた病人が死んでしまうような時に用いられる。(スバルビィ)
- コバルビアスの宝典には異表現で“Nadar, nadar y ahogarse a la orilla. 泳いで、泳いで、岸近くで溺れる”が収載、最も危険な瞬間をやり過ぎた者が、最終目標に近づいて手に入りそうになったとたんに気力が失せてしまうことを言う、とある。また、コレアス諺集には標題と共に、“Nadar y nadar, y morir a la orilla; o ahogar a la orilla. 泳いで、泳いで、岸近くで死んでしまう／溺れてしまう”が収載されている。
- いろいろ苦労したけれども、結局は無駄骨を折ることになってしまった、何の利益もあがらなかったという意のことわざは、こちらでは“労して功なし”とか“骨折り損の草臥れ儲け”などがある。また、苦労したあげくやっと手に入りそうになった最終段階で気のゆるみや不注意から失敗しないようにとおしえてくれるのが“油断大敵”，“油断は大敵の基”などのことわざである。

1020. Nada tiene el que nada le basta.

満足しない者は 何にも持っていないのと 同じ

- 貪欲な者はいつももっと欲しいと思っているので、もうすでに持っているものがどんなに多くてもそれがわずかなものに見えてしまう。(パロス)
- 同義の諺には “Ninguna cosa hace pobre al avariento sino lo riqueza. 強欲な者を貧しくするのは、財宝だけである” (筆者の諺辞典, 諺 1045 を参照), “No es pobre el que tiene poco, sino el que codicia mucho. ほとんど持たない者が、貧しいのではなく、たくさん欲しくてたまらない者が貧しいのである” (同辞典, 諺 1092 を参照), “No los que poco tienen son pobres, mas los que mucho desean. ほとんど持たない者が、貧しいのではなく、たくさん欲しがる者が、貧しいのである” (同辞典, 諺 1154 を参照)
- これにぴったりの日本のことわざには, “長者富に飽かず”, “金と塵は積もるほど汚い” などがある, 金持ちは, 金がかたまればたまるほど欲がでて満足することができなくなる, また他方では, 金を出し惜しみするようになってけちになるの意。そういう欲深のけちに対して次ぎのスペインのことわざは皮肉ってこう言う, “Nadie debe vivir pobre por morir rico. 誰も金持ちで死ぬために貧しく生きるべきではない” と。

1021. Nadie diga de este agua no beberé.

誰も こういう水は飲まないと言いな

- 人の長い人生においては, どんな事その身に起こるかかわからないし, また, その人の置かれている状況めまぐるしく変わっていく, だから後で困るような決定的な態度, 言動をとるべきではない, と尊大な者を戒めている。(筆者の諺辞典, 諺 963 を参照)
- スバルビィによると, 標題のことわざの後にこうつけ加えることもある; “por muy turbia que esté. どんなに濁っていようと” 他の者に起こることは, わが身にいつ起こっても不思議ではない世の中であるから, 世の決まりから逃げることを自慢すべきではない。
- コレアス諺集には, 異表現で “Nadie diga de esta agua no beberé; nadie no diga,

no diga nadie de esta agua no beberé.” が収載されている、邦訳は上記と同じ。世の中はめまぐるしく変転するということをおしえている。

- 例題：ドン・キホーテ第二部 55 章，ろばと一緒にまっ暗な深い穴に落ち、やっと救いだされたサンチョが次々とくりだす得意のことわざの中の一つ。昨日までは太守の椅子にどっかと座って命令していた身分だったのに、今日は穴の底に落ちこんでこのように惨めで哀れなわし、人の運命はこんなにも変わりやすい意で使っている，“…； y cual el tiempo, tal el tiento; y nadie diga <esta agua no beberé>;…こういう時には、こういう風に、とな。そいからな、誰だって、こういう水は、わしゃ飲まねって、言えねえだ一きょうはひとの身、あしたはわが身。”(続編三、高橋正武訳)
- スペインのことわざが言わんとしていることは、日本のことわざでは“有為転変の世の習い”，“浮世は回り持ち”(この世の貧富、幸不幸、苦楽などの諸相は、人から人へと移って行き、一つ所に止まらない一故事，ことわざ活用辞典)，“昨日は人の身今日は我が身”，“浮世は回る水車”などであろう。こういう世の中だからこそこういう水は飲まないなどと思いが上がった振るまいをするなど標題のことわざはおしえている。“平家物語”の冒頭の一文“驕れる人も久しからず”がそれを端的に表現している。

1022. Nadie entre en el bien sino mirando cómo ha de salir de él.

幸福から いかにかに去らねばならぬかを考えることなしに そこに入るな

- いつなんどき逆境に見舞われるかもしれないこの世では、どっぷりと幸運な状況に頭まで浸かるべきではなく、分別をもって日々を生きていくようにとおしえている。
- コレアス(諺集)によると、人が年間の仕事をこなしていく上で、順調な時でも節度を保ち、また、主人の引き立てにも有頂天にならないようにとおしえていることわざ。
- これは、この世は無常で、勢いの盛んなものはいつか必ず衰えるという仏教のおしえである“盛者必衰”，“物盛んなれば則ち衰う”(史記)，“月満つれば則ちかく”などの東洋思想を踏まえたスペインのことわざである。

1023. Nadie es profeta en su tierra.

予言者 故郷に容れられず

- 身近にあり、よく知っているものには尊さや畏敬の念が感じられないということ。

- これは新約聖書の中のイエスの言葉で御自身を指して言われた。故郷のナザレの会堂での宣教開始の日、イエスの口からでる恵み深い言葉に驚いて人々が“この人はヨセフの子ではないか”と口々に言いはじめたことを受けて、“Les aseguro que ningún profeta es bien recibido en su propia tierra. 予言者は、自分の故郷では歓迎されないものだ”とイエスは言われた。(ルカ 4-24)
- イエスの同郷の人々は、イエスは貧しい大工の子であると知っていたし、また、ガリラヤの村のナザレではイエスがほとんど奇跡を行わなかったので、イエスを軽んじたのである。日本にもぴったり同じ意の諺がある；“所の神はありがたくない”，“所の坊さん有り難からず”，“遠きは花の香”，“花の香近きは糞の香”など、いずれも手の届かないような遠くにあるものは、よく思われ尊いが、あまりにも近くにあるものには親密感こそ感じてても畏敬や尊敬の念は起らないということ。

1024. Nadie está contento con su estado, o con su suerte.

誰もが 己の運命に 満足していない

- 人間の本来の性向は、いつでもすでに持っているもの以上のものを欲することを言い表わしていることわざ。(スバルビィ)
- 例題：セレスティーナ第7幕、仕事をいっこうに覚えようとしないうエリシアにセレスティーナは、年とってから仕事も収入もないつらい目に会って泣くだろうとお説教する、それに対しエリシアは平然とこう言う、“Aunque los ricos tiene(sic) mejor aparejo para ganar la gloria, que quien poco tiene, no hay ninguno contento, no hay quien diga: <harto tengo>; …金持てるのは、栄光をうるために、道具だてをほとんど持たぬ者よりか、ずっと立派なものを持っているけどね。なんの満足もないのよ。わたしは十分でございますと言う者はいないのさ。”(魔女セレスティナ、大島正訳) ここでは標題のことわざそのままが用いられてはいないが、その言わんとすることがエリシアのせりふの中によく言い表わされている。
- すでに“長者富に飽かず”は見えてきたが、スペインのことわざは、一般的に人というもの誰でも現在ある自分の状態に満足していないという意味合いが強い、それは社会的地位とか、経済状態、健康の良し悪しとか、いろいろ人によって違うであろうが、ともかく現状に何かしらの不満があるというのが大多数の人の本音であろう。

1025. Nadie extienda la pierna sino hasta donde la sábana llega.

誰でも シーツのたけより 足を伸ばすな

- 人は、何ごととも無理せず、背伸びせずに自分の身の丈に合ったことをしなさい、つまり自分でできる範囲内でせよとおしえている。また、バロスによると、人は持っていないものをさも持っているようなふりをするなどという意。
- コレアス諺集には標題のことわざと共に異表現で “Nadie extiende la pierna más de hasta donde llega la sábana. 誰でもシーツのたけより長く足を伸ばすな” が収載されている。
- 例題：ドン・キホーテ第二部 53 章、わしは太守になったり、敵が攻めてくるのを防えだりに、生まれて来たでねえ、昔の気ままな暮らしがしたいと道理に合った言葉をたくさんのことわざを混ぜてとうとうと述べるサンチョ、“… y nadie tienda más la pierna de cuanto fuere larga la sábana, …誰ととも、蒲団のたけより脛を伸ばすな。”（続編三、高橋正武訳）註 86：<No extiendas la pierna más que lo que la manta llega. 掛けぶとんの届く長さ以上に脚を伸ばすな>ということわざは、何ごととも自分の能力の範囲内で処理せよという教え。
- 日本の類義のことわざには“分相応に風が吹く”，“大きな家には大きな風”などがある、いずれも人にはそれぞれの身分に応じた暮らし方があるということ。

1026. Nadie no diga mal del día hasta que sea pasado y la noche venida.

夜が来て その日が過ぎるまで 悪い日だったと 誰も言うな

- 物事は、はっきりとわかるまで良かれ悪しかれ早急な判断を下すなどということ。
- バロス諺集には、類義で “Nadie se alabe con trigo hasta mayo salido. 5月が過ぎるまで、誰も小麦を自慢するな”（6月までは畑に霜が降りるような寒い日が続くから安心できない—筆者），“Nadie se alabe hasta que acabe. 終わるまで誰も満足するな”，“Hasta el fin nadie es dichoso. 終わりまで誰も幸運ではない”，“No alabes hasta que pruebes. 試すまでほめるな”，“No alabes ni desalabes hasta siete navidades. 7回のクリスマスが過ぎるまで誰もほめたり、けなしたりするな”などの一連のことわざがある、いずれも標題のことわざと同じく、いたずらに嘆いた

り、ぬか喜びしたりしないようにと戒めている。

1027. Nadie se acuerda de Santa Bárbara hasta que truena.

雷が鳴るまで 誰もサンタ・バルバラを 思いださない

- 人は誰でも過ぎてしまった災難はすぐに忘れてしまう忘れっぽい性質があるものである、次ぎに思い出す時は、もう一度同じような災難に見舞われた時である。ことわざは、危険を感じた時にあわてて対処するのではなく、常日頃から用心は怠りなくせよとおしえている。
- “Santa Bárbara- サンタ・バルバラ” とは、人々を雷から守ってくれる守護聖人である。天気の良い日には誰もこのサンタを思いださないが、雷がゴロゴロと鳴りはじめると人々は口々にサンタの名前を唱えてお祈りを始めるのであろう。
- 誰でも“喉元過ぎれば熱さを忘れる”とか“病治りて医師忘る”の傾向があるゆえ、いくら“用心は前にあり”とか“転ばぬ先の杖”などが肝心とわかっていても、凡人にとっては、スペインのことわざが言っているようなことになるのではないだろうか。

1028. Nadie se meta donde no le llaman.

誰も 呼ばれていないところには 顔だすな

- 直接かかわりが無い事には余計な口をだすべきではないということ。
- バロス諺集には類義で、“Agua que no has de beber, déjala correr. 飲んではいけない水は流れるにまかせよ”，また、コレアス諺集には“A boda ni a bautizado, no vayas sin ser llamado. 結婚式と子供の洗礼式には、招待されていなければ行くな”，“A bodas y a niño bautizado, no vayas sin ser llamado. 同訳”（パーティなどの会食には、特別に招待されていなければ駆けつけるべきではない）
- 例題：ドン・キホーテ第二部 62 章，富裕な騎士ドン・アントニオは、背中に貼り紙をつけたドン・キホーテを外に連れ出し衆人の目を集めさせる、そのうちの一人がドン・キホーテに悪態をつきはじめてたのでドン・アントニオがことわざを使ってこう言う，“…, seguid vuestro camino, y no deis consejos a quien no os los pide. ………, y no os metáis donde no os llaman. とっとと先へ行かれるがいい。頼みもしないのに忠言めいたことはおやめなさい。…よけいなお節介はやめてもらいたい。（続編三、高橋正武訳）

- 頼まれもしないのにお節介をやくことを日本では、“人の頭の蠅を追う”という、“人の頭の蠅を追うより己の頭の蠅を追え”とする表現もよく使われている。また、関係のないことにいらざる心配をすることをたとえたことわざには“人の疝氣^{せんき}を頭痛に病む”がある。

1029. Nave (La) que ha buen viento, presto arriba al puerto.

追風を受けた船は すばやく港に着く

- 何事においてもよい条件が揃って幸運に恵まれている時は、何の支障もなく全て順調に早くいくものである。
- 日本にも同じく船と風の比喩を用いた類義の“追風に帆を上げる”，“得手に帆を上げる”，“順風満帆”，“追風に風”などがある，いずれもいい機会に恵まれ物事が快調に運ぶ意。
- バロス諺集には“nave- 船”のでてくるこういう諺もある；“La nave y la mujer, de lejos parecen bien. 船も女も，遠くから見るとよく見える”（両者の外観の調和のとれた美しさをいう—バロス）

1030. Necedades (Las) del rico pasan por sentencias en el mundo.

金持ちのたわ言は 世間をまかり通る

- 金の威力がどんなに大きいかをいう。どんなばかげたでたらめを金持ちが言っても，それに異を唱えたり，批難したりする者はめったにいない。（スバルビィ）
- 例題：ドン・キホーテ第二部 43 章，これからいよいよ島の太守になるという文盲のサンチョに，せめて自分の名前ぐらゐは署名できなくては困るというドン・キホーテにサンチョはこう答える，“…； y las necedades del rico por sentencias pasan en el mundo; y siéndolo yo, siendo gobernador y juntamente liberal, como lo pienso ser, no habrá falta que se me parezca. 金持がするばかは，それでいいこととして世の中に通るだが，わしが金持になればね，太守にかねて，大尽になるつもりだから，あやまちと見られるあやまちはあるはずねえでさ。”（続編二，永田寛定訳）
- 日本にもびったり同義，表現も類似の“金が言わせる旦那”，“金が言わせる追従”，“持った前にはつくぼう”，“持てば殿様”など多数ある，いずれも金の力でどんな旦那であろうと，旦那，旦那ともち上げられるということ。どこの国でも金が幅をき

かすのは同じらしい。

1031. Necesidad (La) carece de ley.

窮すれば濫す

- 人は食べるのに困ると、法などには構ってられなくなりどんな悪いことでもしでかすということ。
- スバルビィによると、人というものは差し迫った困窮に直面すると法や社会的義務からも免れられると判断するものである。また、コバルビアスはこのことわざの思想はありふれていてとても陳腐であると一蹴している。
- コレアス諺集に類義のことわざ “Necesidad hace al hombre trastornar y trajinar. 窮乏が人を駆り立て、奔走させる”, “La necesidad obliga a lo que el hombre no piensa. 窮乏が人が今まで思いもなかった事をさせる” などが、また、パロス諺集には, “La necesidad hace a la vieja trotar y al gotoso saltar. 窮すれば婆さんは駈けずり回り、痛風病みが跳ね回る” (人は難儀にあうと不可能と思われていた危険なことでもしでかすものである—パロス) などが収載されている。
- 類義では “衣食足りて礼節を知る” (管子), “礼は有に生じ無に廢る”, “飢えたる犬は棒を恐れず”, “逃ぐる者道を扱はず” (追いつめられて苦境に立った者は、どんなことでもする), “窮すれば濫す” (困窮すると悪い事でもする) など多数ある。

1032. Necesidad (La) hace maestros.

窮乏が 名人を 作る

- 食べるに困ると人は何でもおもいつく。
- 類義のことわざには、パロス諺集に “El mejor maestro, el hambre. 飢えが人を名人にする” が、スバルビィ諺集には “La necesidad es grande maestra de invenciones. 窮乏は、発明の大師匠”, “La necesidad es gran inventora. 窮乏は偉大な発明家”, “La necesidad es maestra de sutillar el ingenio. 窮乏は、才智を研ぎすます師匠”, “De la necesidad nace el consejo. 食うに困るといい知恵が浮かぶ”, “La necesidad aguza el ingenio. 食うに困ると、才智が鋭くなる” などが収載されている。スバルビィの解説によると、これら一連のことわざは、人というものは、必要に迫られたり、追いつめられて苦境に陥ると、才智を十分に発揮させるこ

とができるものである、また、今まで学ばなかったような事や、知らなかった事までも、手際よくやってのけることができるものであることをおしえている。

- 例題：セレスティーナ第9幕，利用するためには心にもないおべんちゃらを言う，いったい誰があの婆にそのようなさもしいことを教えやがったのか判らないという仲間に，カリストの従士，パルメノがこう答える，“La necesidad y pobreza, la hambre, que no hay mejor maestra en el mundo, no hay mejor despertadora y avivadora de ingenios. それは暮しに困るということと，貧乏，それに腹がへるからさね。ことに，この飢えというやつより秀れた師匠は，この世にはないんだぜ。またそれ以上に悪知恵を呼びさまし，生き生きさせるものはないのさ。”（魔女セレスティナ，大島正訳）
- こちらには人は，貧乏していると知恵の働きが鈍くなるという全く反対のことわざがある；“人貧しければ智短し”，“貧すれば鈍する”など。

1033. Necesidad (La) tiene cara de hereje.

飢えたる者は 異端者の顔してる

- 腹を空かしている者は，追いつめられた者のような苦悩に満ちたひどい様子をしているということ。
- “hereje- 異端者” カトリック世界で13世紀に設けられた異端審問所では，主に異端者の告発と処罰が行われていたが，スペインでも異端者に対する取り調べと処罰は苛酷を極めていた。特に，スペインでは15世紀後半以降は，カトリック両王によって，ユダヤ教やイスラム教からキリスト教に改宗した新キリスト教徒（conversos）対策のために機能が一新された。改宗させるのにも残酷な拷問が行われたが，その後の改宗者に対しても，常に異端審問官の目が光っていた。1834年に異端審問所が廃止された。コバルビアス（宝典，1611年）は，“異端者”という呼び方は，今日では嫌悪すべき忌むべきものであり，また，救い主イエス・キリストと主の教会が説くキリスト教教理に反するものであると解説している。
- スバルビィ諺辞典：“tener cara de hereje- ある人とか，あるものの様子が恐ろしいげである”
- Real Academia Española スペイン語辞書：“cara de hereje- 恥じ知らずな，厚顔無知な，破廉恥な”
- 飢えに関して，コレアス諺集には次ぎのようなことわざもある，“La necesidad de

mi casa, nadie la pasa. わたしの家のひもじさは、他の人は誰も経験しない”（このような大きな苦痛を味わうのはわたしだけで、他の者ではない—コレアス）

1034. Necio aquel que padece por culpa que otro merece.

他者の科（とが）を負うは 愚か者である

- 一般的に大きな罪を犯す巨悪は法の目をくぐり、罰を受けるのは雑魚ばかりであるということ。
- ここでの“necio- 愚か者”は、愚鈍な者とか間抜け、小物、ヤクザの世界でなら使いはしり、鉄砲玉で、サラリーマンの世界なら課長、あたりであろうか。目端のきく抜け目のない大物、親分、社長、大臣級は罪を下にいるものに被せて自らは捕まるようなことはしない。
- ここにもびったり同義のことわざがいくつかある；“皿嘗めた猫が科（とが）を負う”（魚を盗んだ猫はとうに逃げてしまったのに後からきて皿を嘗めていた猫が捕まって酷い目にあう—故事，ことわざ活用辞典），“米食った犬が叩かれずに糠食った犬が叩かれる”（大きな悪事を働いた者は罰せられないで、それにかかわって小さな悪事を犯した者が罰せられる—同辞典）“策（ざる）嘗めた犬が咎かふる，”，“綱にかかるは雑魚ばかり”など。これらはスペインのことわざの真意を面白いことわざ特有のたとえを使って言い表わしている。

1035. Necio (El), callando, es tenido por sabio.

愚か者でも 黙っていれば 賢いと思われる

- 常に人は控えめであることが大切である。
- コレアス諺集には異表現で“El necio callando, es tenido por sabio; o parécese al sabio. 愚か者でも、黙っていれば賢いと思われる／賢い者に似る”
- バロス、スバルビィとコレアス諺集には“necio- 愚か者”について次のようにいくつかのことわざがある；“Necio es quien piensa que otro no piensa. 他の者が思いつかない事を愚か者は思いつく”（自分に良識があるからといって、他のものたちも同じであると考えるのは間違いである—スバルビィ），“El necio hace al fin lo que el discreto al principio. 賢い者が最初にする事を、愚か者は後です”（ぴったり同じ意のことわざが日本にもいくつかある；“下種の後知恵”，“馬鹿の知恵は後

から出る”，“下種の後思案”などいずれも浅薄な者は、事の当座はよい考えが浮かばず、事が終わってから考えつくものであるの意(筆者)，“El necio, en su casa ni en la ajena sabe nada. 愚か者は、自分の家でもよその家でも何にも知らない”，“El necio, ni lo venidero sabe huir, ni lo presente sufrir. 愚か者は、先にある危険を避けることも知らないし、今ある苦痛を辛抱することもできぬ”，“Necios y porfiados hacen ricos los letrados. 愚か者と頑固な者が弁護士を金持ちにする”（相手に譲歩しないという頑固さとか愚かさによって裁判にまで持ちこむことが多々あるから—バロス）

- 人が黙っている時は、本当に何にも知らないから話さないのと、物事を深く知っているが、その知識を軽々しく口に出さない、という二通りがある。標題のことわざは前者であり，“知る者は言わず言う者は知らず”（老子）は後者である。スペインのことわざでも日本のそれでも多言より沈黙のほうを重んじている傾向がある，“言わぬは言うに勝る”，“雄弁は銀，沈黙は金”，“言わぬ言葉は言う百倍”などもそうである。ましてや愚か者がつまらない事をしゃべってその無知をさらけだすよりは、黙っているほうがよほどましである。

1036. Ni al buen hijo heredar ni al mal dejar.

良い息子であろうと 悪い息子であろうと 財産は残すな

- 親は息子に財産を残そうとあれこれ思い悩むな、悪い息子はもらうに値しないし、良い息子なら神が手をさしのべてくれるであろうから。（コレアス）一般的には，“子孫に美田を残さず”という意で、財産を残すと子供を甘やかし、独立心を失わせてしまうから財産は残すべきではないということ。
- “岩波，ことわざ辞典”によると、日本には江戸時代から財産を残すと子孫が駄目になってしまうということが言い出されていたらしい、たぶん実際に起こった事を踏まえて“長者に二代なし”，“長者三代”などのことわざがある。これらを具体的に描写した“親苦勞す，子は樂す，孫は乞食す”，“親は苦勞して死し，その子は楽しみて死し，その孫は乞食して死す”，“父骨を折り子樂をして孫乞食をする”，“親は稼ぐ，子は樂する，孫乞食する”，“親苦，子樂，孫乞食”などいろいろな異表現のことわざがある。

1037. Ni al niño que se eche, ni al viejo que se levante.

子供は寝そべるな 年寄り は立ち上がるな

- 子供は外で元気よく遊び、年寄りは家の中で静かに休んでいなさいということ。
- 日本にも同様に、“子供は風の子”，“大人は火の子” などということわざがあり、子供は寒くても家の外で元気よく遊び、大人は寒さに弱いので、火の傍でじっとしていると言う。また、年寄りにふさわしくないことを平気でする行いを皮肉って“年寄りの冷や水”とか“年寄りの夜歩き”などと言う。

1038. Ni al tahúr qué jugar, ni al gastador qué gastar.

賭博師は 何に賭けるかに 浪費家は 何に使うかに 困らない

- いつでもすぐ見つかる。賭けごとが好きな者は何にでも賭けるし、金遣いの荒いものは何にでも金を使うから。
- 理屈をつけようと思えば、どんなにでももっともらしい理屈がつけられるという日本のことわざの“理屈と膏薬は何処へでも付く”と類義のスペインのことわざである。

1039. Ni ames a quien amó, ni sirvas a quien sirvió.

惚れたことがある者には 惚れるな、仕えたことがある者には 仕えるな

- そのような状態に一度でもなった者は、その時の苦痛をよく知っているのだから、相手にもつらい犠牲を求めて己を満足させようとするから。(パロス)
- コレアス諺集には、異表現で、“Ni sirvas a quien sirvió ni pidas a quien pidió, ni mandes a quien mandó. 仕えた者には仕えるな、お願いした者にはお願いするな、命令していた者には命令するな”(そういう者たちは悪知恵が働くので、こちらの策略が簡単に見透かされてしまう。)が、類義で“El monacillo que vino a ser abad, sabe lo que hacen los mozos detrás del altar. 寺者が司祭になると、祭壇の陰で小僧たちががしていることがわかる”などのことわざがそれぞれある。また、パロス諺集にも異表現で“Ni sirvas a quien sirvió, ni pidas a quien pidió, ni mandes a quien mandó, ni ames a quien amó. 仕えた者には仕えるな、お願いした者にはお願いするな、命令したことがある者には命令するな、惚れたことがある者には惚れるな”

(以前同じような状態にいた者は、ことのほか横暴になるのでそれを我慢するのはとても辛い—パロス)がある。

- 辛い目に会ってきた者の仕返しはとてもこわい、己を殺して姑に仕えてきた者が、姑になると嫁に同じような仕打ちをするようになるとはよく言われていることである。また、親にいじめられて育った子供は、大人になって自分の子供を持つと、子供にも同じようないじめを繰り返す。

1040. Ni ausente sin culpa, ni presente sin disculpa.

せいにされない 欠席者もいないし、弁解しない 出席者もいない

- いつでもその場にはいない者が、大きな罪を着せられ、そこに居る者は、事実であろうとなかろうと、(責めに対して)申し開きができるということ。(パロス)
- こういう事はわれわれの社会ではよく起こることである。それをことわざ特有の比喩なしに端的に言い表わしたことわざである。しかし、表現的には反意語を使い、それぞれに韻を踏ませている工夫は見られる，“ausente- presente, 欠席者—出席者, culpa- disculpa 罪, 責任, せい—容赦, 許し, 弁解, 言い訳”など。

1041. Ni beber de bruces, ni mujer de muchas cruces.

うつぶせになって飲むのも すぐに十字を切る女も ごめんだ

- うつぶせではむせかえて(水を)飲み込めないように、何にでもすぐに驚いて十字を切るような小心な女には、こちらがむせかえてつきあいきれないということ。
- パロスによると，“mujer de muchas cruces”には，“beata- 偽善的な女, remilgada- 気取った, 体裁ぶった女, espantadiza- びくびくした, 小心な女, monja- 修道女”などの意がある。
- コレアス(諺集)によると、おおげさに何にでも驚いてみせ、その度に十字を切り、十字を切る度にあ々驚いたと言う女がいるものである。また、修道女も度々十字を切るものである、格子越しに見る彼女らの顔は受難に満ちた顔をしていると面会者は言う。ことわざの十字を切る女は、祭壇をよく訪れては十字を切る偽善的な女である可能性もある。
- スペイン語には“tragar- 飲み込む, 飲み下す”という単語があるが、この“tragar”には、“我慢する, こらえる, 信じがたい”という意味もある。標題のことわざには、

うつぶせでは飲み込むことができないように、すぐに驚いてみせる女にはこちらがしらけてしまっただけでこらえることができないという比喩の面白さがあると思う。

1042. Ni casa cabe río, ni viña cabe camino.

川の傍らの家も 通りの傍らのブドウ園も ごめんだ

- 川近くの家は、川の氾濫やけ崩れの危険があるし、道路に近いブドウ園には、動物や人間が侵入して、ブドウ園を荒らし、果物が盗まれる怖れがある。(パロス)
- パロス諺集には、異表現で “Ni cabe río, ni en lugar de señorío hagas tu nido. 川の傍らにも、領主の傍らにも家を持つな” (川の近くは危険だし、領主の支配下にあるのは窮屈である—パロス) がある、また、コレアス諺集にも次のような異表現が収載されている； “Ni cabe peña, ni cabe río, ni en lugar de señorío, no armes castillo. 岩山とか川、或いは、領主の近くには城を建てるな” コレアスによると、Nájera (スペイン中北部の La Rioja 県の県都, Logroño にある—筆者) にはこれら三つのものがある；すなわち、ナヘラの町を同名のナヘラ川 (Ebro 川の支流—筆者) が流れ、その川は氾濫すると町に被害をもたらした、また、ここの領主はマケダ公爵で、その領地は軟らかい岩山の下にあった。雨嵐になると、岩山が崩れて洞窟に作られた住居に甚大な被害を与えた。(これらの住居は) 戦争があった時代に岩の上や、近隣の山々から襲ってくる敵から逃れるために、(洞窟の中に) 建てられたものである。“Ni casa en cantón, ni cabe mesón. 角地に、またメソンの傍に家を建てるな” (角地の家には風が強く当たるし、メソンの傍は非常にうるさいから)，“Ni casa en cantón, ni viña en rincón. 角地に家を建てるな、隅っこにブドウ園を作るな” (二本の道が交差した角にあるブドウ園は、そこを通るあらゆるものから被害を受ける—コレアス)

1043. Ni en burlas ni en veras con tu amo no partas peras.

冗談にしろ 本気にしろ 主人には なれなれしくするな

- 目下の領分をわきまえて、目上に対する時はいつも礼儀正しい言動をとるべきである。
- コバルビアスの宝典には、“En burlas, ni en veras con tu amo no partas peras. 同訳” (自分は目下であり、使用人であるということを忘れて主人を同等扱すべきではない—コバルビアス) が収載。また、パロス (諺集) は、上の地位にある者とは、論争したり、取り引きするのは好ましくない、というも、下の者にとってうまく事

が運んだためしがないからとコメントしている。

- スペイン語辞書 (Real Academia Española) - “partir peras con uno- 口語的表現で、ある者になれなれしい、気さくな態度で接する (否定語と一緒に使われることが多い)”
- こちらには、師弟関係については、“三尺去って師の影を踏まず”，“七尺隔つ師弟の礼”，“師弟となって七足去る”などのことわざがある、いずれも弟子は師を敬い、常に礼儀正しく、どんなときでも失礼なふるまいをしてはならないという意。また、標題のことわざの真意に近いのは“心安いは不和の基”であろうか、この場合は、親しい間柄でも遠慮がなくなるとかえって仲違いになることが多いので気をつけよという意である、親しい間柄でさえ礼を失することがあってはならぬというのであるから、上下のある間柄ではなおさらである。たとえ目上の者が目下に目をかけてくれて気安く接してくれても、目下の立場からいえば“良い仲も笠を脱げ”の礼儀正しさは守るべきであろう。

1044. Ni moza sin espejo, ni viejo sin consejo.

鏡を持たぬ娘っ子も お説教しない年寄りも いない

- 年頃の娘はどんな時でも鏡を覗きこんでいるし、年寄りは誰に対しても人と見ればお説教をたれるということ。
- “moza- 若い娘” についてのことわざがその他にもあるので、見てみよう；まずスバルビィ諺集には“Ni moza fea, ni obra de oro que tosca sea. ブスの娘っ子も、見映えのしない金細工もない” (若さが持つ魅力と、材料が上等であれば、たとえ作りが少々不細工でも値段が上がる一スバルビィ)、また、コレアス諺集には“Ni moza fea, ni vieja hermosa. ブスの娘っ子も、美しい老婆もない” などが収載されている。
- ついでに、“mozo- 若造、小僧” については、スバルビィ諺集には“Ni mozo dormidor, ni gato maullador. 居眠りこく小僧も、よく鳴く猫もごめんだ” (こういう小僧は役立たずだから、また、こういう猫は迷惑千万であるから、手許に置いておかないほうがいい一スバルビィ)、“Ni mozo pariente ni mozo rogado, no lo tomes por criado. 親戚の子も、お願いして来てもらった子も、召使には使うな” (こういう子たちは、使用人として使いづらいから一スバルビィ) などが、バロス諺集には、

“Ni mozo goloso, ni gato cenizoso. 食いしん坊でない小僧も、灰かぶりでない猫もない” (火の消えた灰でいっぱいのおでんをとる猫を指すのであろう一筆者) が見られる。

- 現在でも通用することわざであるが、近頃は熟年の婦人で、若々しく、いつまでもきれいな人がスペインにも日本にもたくさんいる。また、暖房設備の整った住居では、灰かぶりの猫などはとんと見かけなくなったのではなからうか、スペインの辺鄙な田舎へ行けばどうかかわらないが。

1045. Ninguna cosa hace pobre al avariento sino lo riqueza.

強欲な者を貧しくするのは 財宝だけである

- 一般的に人というものは、持てば持つほど欲しくなり、その欲望はきりがなくなる。持っているものに満足できないので常に欲求不満の状態に落ちいる。“金持ちでありながら貧乏” という言葉がぴったりのことわざである。同義の諺には “Nada tiene el que nada le basta. 満足しない者は、何にも持っていないのと同じ” (筆者の諺辞典, 諺 1020 を参照) がある。
- 例題：セレスティーナ第 12 幕、カリストの従者ふたり、パルメノとセンプロニオが、俺たちの分け前をよこせと、セレスティーナにかけ合うが、強欲でしたたかなセレスティーナはてんで相手にしようとしな、そこでセンプロニオが婆さんは貧乏な時はおおようだが、金持ちになると強欲だよ、とことわざを口に出す、“…, y ninguna cosa hace pobre al avariento sino lo riqueza. 強欲なる者を貧しくするは、富にしくはなしだわさ。” (魔女セレスティーナ, 大島正訳) この後、続けて類義の “De lo poco, poco; de lo mucho, nada. すこしのときは、ちょっとり、多けりゃ何もやらぬ” (同上) ということわざも使う、セレスティーナにはぴったり合ったことわざである。
- すでに見てきた “長者富に飽かず” がこちらでは同義のことわざである。

1046. Ninguna maravilla dura más de tres días.

どんな目新しさも 三日以上は続かぬ

- 新鮮な驚き、感動はすぐ忘れ去られるということ。テレビがなかった昔でさえそうなら、次ぎから次ぎへと新しい商品のコマーシャルや、新しい出来事が日々われわれの前に躍りでてくる現在ではなおさらであろう。

- 紀元前 10 世紀のイスラエルの王であり、賢人としても有名だったソロモン（イスラエル第二代の王ダビデの息子）は、すでに次のようにこの世のもの事の真理をこう喝破していた；

“¡Vana ilusión, vana ilusión!
¡Todo es vana ilusión!

なんという空しさ、なんという空しさ！
すべては空しい。(コヘレトの言葉, 1-2)

Unos nacen, otros mueren,
Pero la tierra jamás cambia

一代過ぎればまた一代が起こり
永遠に耐えるのは大地(同, 1-4-5)

No hay nadie capaz de expresar
cuánto aburren todas las cosas;
nadie ve ni oye lo suficiente
como para quedar satisfecho.
Nada habrá que antes no haya habido;
nada se hará que antes no se haya hecho.
¡No hay nuevo en este mundo!
Nunca faltará quien diga:
<¡Esto sí que es algo nuevo!>
Pero aun eso ya ha existido
siglos antes de nosotros.
Las cosas pasadas han caído en el olvido,
y en el olvido caerán las cosas futuras
entre los que vengan después.

何もかも、もの憂い。
語り尽くすこともできず
目は見飽きることなく
耳は聞いても満たされない。
かつてあったことは、これからもあり
かつて起こったことは、これからも起こる。
太陽の下、新しいものは何ひとつない。
見よ、これこそ新しい、
と言ってみても
それもまた、永遠の昔からあり
この時代の前にもあった。
昔のことに心を留めるものはない。
これから先にあることも
この後の世にはだれも心に留めはしまい。
(旧約聖書, コヘレトの言葉, 1-8-12)

- コレアス（諺集）も標題のことわざは、“すぐに次ぎの目新しいことの出現により前のものは忘れられる”と言うコメントをしている。
- ソロモンの言葉は何と無常感に満ちていることだろうか。全てのものごとは誰の心にも留められずに忘れ去られ、新しく見えることさえも、川が海に絶えまなく注ぐとい

う同じ流れを繰り返しているように同じ道程を繰り返しているに過ぎないと。日本には、世の中は常にとどまることなく移ろいやすいと、人生のはかなさ、無常を謳ったものが多い、“飛鳥川の淵瀬”，“昨日の淵は今日の瀬”，“朝に紅顔ありて夕べに白骨となる”，“昨日の娘今日の老婆”，“昨日の花は今日の塵”など。

1047. Ninguno se embriaga del vino de casa.

家で飲むワインには 誰も酔わない

- 日頃見慣れている場所で、見慣れている人たちと、飲み慣れている酒を飲んでもうきうきと気分が昂揚しないように、人は常にあるものにはあきあきするという。一般的に人はわくわくとした新鮮な気分を味わいたく変化を求めるのであろう。このことわざにはあらゆる世の男性はそうだそうだとあなづくのではなからうか。普通、男が酒を飲みたくなるのは日頃の憂さや仕事を忘れて気分の転換をはかるためであろう、そういう場合に、酒場で美しい女たちに囲まれて飲む酒と家で古女房を相手にして飲む酒とではどちらがその目的に適うであろうか。
- コレアス諺集には異表現で、“Ninguno se embriaga jamás del vino de casa. 家で飲むワインには誰も決して酔わない”（標題のことわざを“jamás-決して～ない”で強めている一筆者）
- 日本人は花見をしながら飲む酒も大好きなようである，“酒なくて何の己が桜かな”などは、花見は酒をおいしく飲むためのほんのつまみのようなものである。

1048. Ninguno siente de qué parte aprieta el zapato sino el que le trae calzado.

靴を履いている者だけが どこに靴ずれするか 知っている

- 他の誰でもなく、当事者だけが苦しんでいる理由を知っているをたとえて言う。詳しい説明は、筆者の諺辞典の諺 205 “Cada uno sabe dónde le aprieta el zapato. 人は足のどこに靴ずれするか知っている”を参照して下さい。

1049. Ningún perro lamiendo engorda.

どんな犬も 舐めるだけでは 太らない

- わずかなものを寄せ集めても金持ちにはならない、或いは、他者に卑下しておべっか

を使っても成功しないということ。(パロス) わずかな給金を稼いでも金持ちにはなれない。一般的に、人はあまり明瞭でない手段を使って金持ちになるものである。

(スバルビ)

- “爪に火を点す” のことわざのようにけちけちと儉約してつましい暮らしをして金を貯めても、スバルビが言うように入ってくる金が少なければ金持ちにはなれない、しかし、“塵も積もれば山となる” とか “砂長じて巖となる”^{いまご}、 “小さな流れも大河となる” などのような反義のことわざがあり、こちらのほうがよく使われている。

1050. Niño (El) regalado, siempre está enojado.

甘やかされた子供は いつもぶりぶりしている

- 物が豊富にあることと、甘やかしほど子供をうんざりさせ、飽きさせるものはないから。(パロス)
- コレアス諺集には、 標題のことわざと共に異表現で “El niño regalado en todo tiempo es airado. 甘やかされた子供は、しじゅうぶりぶりしている” が収載。
- その他 “niño- 子供” についてのことわざがコレアス諺集には、“El niño y el cochino, adonde les dan el bocadillo. 子供とブタは、おやつを上げる人について行く”、“El niño y pece en el agua crece. 子供と魚は、水の中で大きくなる” などが、パロス諺集には、“Los niños, de pequeños; que no haya castigo después para ellos. 小さかった頃に、お仕置きされなかった子供は、後でされる” (子供の時におしえてもらった事は忘れないが、悪い習慣のまま大人になると、たとえその事後で罰を受けてもそれを矯正できない—パロス)、“Los niños y los locos dicen las verdades. 子供と狂人だけが、本当の事を言う” (彼らには何らのとり繕いや、偽善がないので感じたままをありのままに言う—パロス)、“El niño y el potro, primero sarnoso para ser hermoso. おできでいっぱいの子供と子馬は、後で美しく変わる” (小さい頃に醜かった子供は、大きくなると美しく変身する—パロス) などがそれぞれ収載されている。
- 見出しのことわざと類似しているのに “親の甘茶が毒になる”、“親の甘いは子に毒薬” などがある、いずれも親が子を甘やかして育てると、その子の将来のためにならないをたとえて言う。また、子供の時にきちんとした躰を受けていない子供は、年とっても直らないことをたとえて “雀百まで踊り忘れず”、“三つ子の魂百まで”、“頭禿

げても浮気は止まぬ”などがある。

1051. Ni para mozo hay mal cocinero, ni para viejo fiel dispensero.

若造には下手なコックがいない, 年寄りには忠実な賄いがいない

- 若者にはたくさんの食欲があり, どんなものでもおいしく平らげてしまうから, また, 年寄りは誰をも信用しなくなるから。
- 若い時は, いつでもお腹を空かしている, “空腹にまずい物なし” のことわざがぴったりである。それに反して年を取ると, あまり体を動かさないので食欲がない, また, 他人を信用しなくなるしけちにもなるのでごちそうはなるたけ一人で食べようとする, “鯛も一人は旨からず” がこの場合に当てはまるだろう。食事は大勢で楽しくおしゃべりでもしながら食べれば一層おいしくなるのに, 標題のスペインのことわざからは偏屈な孤独な年寄りの姿が浮かび上がる。

1052. Ni por grande dicen bueno, ni por chico ruin.

大きいから良いもののだとは言わないし, 小さいから悪いもののだとも言わぬ

- ものの大きさは質には関係がないということ。
- そのことをずばりと言っているのが次ぎのような日本のことわざである; “山椒は小粒でもびりりと辛い” (体は小さくても才能や気力にあふれ, 力量に優れている), “小さくとも針は吞まれぬ” (小さいからといって馬鹿にはできない), “大男総身に知恵が回りかね”, “独活 (うど) の大木”, “でっかの能なし”, “大きな大根辛くなし” など。反対のことわざには, “小男の総身の知恵も知れたもの”, “大川に水絶えず” (基盤がどっしりとしているものは, 衰えても滅びることはない) などがある。

1053. Ni quito ni pongo rey, mas ayudo a mi señor.

どっちにもつかぬが わしは己のご主人を助ける

- 何らかの事柄に積極的に自分のほうから関わりを持つことを避ける時に用いられる格言。(スバルビィ)
- “Ni quito, ni pongo- その事に関しては口出ししない, 干渉しない, よけいなお節介をしな” (コレアス諺集) “ni quito, ni pongo rey- ある事を決断しなければ

ならない時に、積極的に関わることから免れる時に用いられる表現”（スペイン語辞書、スペイン王立アカデミー）“ni quito ni pongo rey- 私にはどうでもいいことだ”（西和中辞典、小学館）

- イリバレン（格言の背景）によると、この格言はカスティーリャの歴史におけるあるよく知られた出来事からきている；それによると、喧嘩をしていてペドロ1世残酷王（カスティーリャ・レオン国王、14世紀中頃一筆者）に組み伏せられた異母兄エンリケ王（カスティーリャ・レオン王国のトラスタマラ王家一筆者）を援護にきていたフランスのベルトラン武将が“Ni quito ni pongo rey, pero ayudo a mi señor. わたしはどっちにもつかぬが、わたしのご主人をお助けします”と言ってエンリケ王を助けた。この二人の兄弟の闘いの最後がどうなったかは非常によく知られていると思うが、エンリケ王がペドロ王を1369年3月23日に倒した。しかし、コレアス（諺集）によると、見出しの格言を言いながら助けたのはアンドラダという名の騎士だそうで、又助けたのは他の者だとも言っている人々がいると付け加えている。
- 例題：ドン・キホーテ第二部60章、ドウルシネア姫の幻術を解いてやるためには、サンチョが自分で自分をムチ打ちしなければならぬのに、それをいっこうにしようとしぬいサンチョにじれたドン・キホーテ自身がサンチョを打とうとする、それに猛烈に怒ったサンチョがキホーテを組み伏せてこう言う、“Ni quito rey, ni pongo rey-respondió Sancho-, sino ayúdome a mí, que soy mi señor. <国王さまを取りのけるでも据えつけるでもねえだ>と、サンチョ。<わしはおれさまの加勢をするだ。おれさまはわしのご主人だで。”（続編三、高橋正武訳）註（Martín de Riquer, ドン・キホーテ第二部、王立アカデミー）：残酷王ペドロと喧嘩をしていたトラスタマラ（トラスタマラ家；スペインのカスティーリャ・レオン王国の王家<1369-1504>およびアラゴン王国の王家<1412-1516>一筆者）のエンリケ王を助けようとして言った Beltrán del Claquín, 或いは Duguesclin の有名な句。

1054. Ni sábado sin sol, ni moza sin amor, ni viejo sin dolor, ni puta sin arrebol.

晴れていない土曜日もなければ、恋を知らない娘っ子、痛みのない年寄り、化粧していない娼婦もない

- コレアスの説明によると、“晴れていない土曜日はない”とは、毎週土曜日には、カ

ラー（取り外しのできる襟）、(16-17世紀の) ひだ襟、(婦人用の) ずきんなどを洗い、それから天日干しにしたのでそう言う、それらの仕事に従事する娘たちを “eatán de sábado- 土曜日の仕事をする” といっていた。もし父親とか主人がどこに娘がいるかを尋ねると、今、娘は日なたで乾かしていますよという返事が返ってきた。実際には土曜日に晴れていようがいまいが、仕事のほうは、きまって毎週土曜日に行われていた。“No hay sábado sin sol. 晴れていない土曜日はない” とは、“No hay sábado sin la tal ocupación y cuidado. その仕事のない土曜日はない” という意になる。いかなる理由も確証もないのに、人々は、本当に“晴れていない土曜日はない” と信じていた。

- バロス諺集には異表現で “No hay sábado sin sol, ni doncella sin amor, ni moneda que no pase, ni puta que no se case. 晴れていない土曜日もなければ、恋を知らない乙女、流通しない貨幣、結婚しない娼婦もない” が収載されている。
- 現在では、標題のことわざを短縮した “Ni sábado sin sol, ni moza sin amor. 晴れていない土曜日もなければ恋を知らない娘っ子もない” が用いられている。スペインには、慣用句として “hacer sábado- 土曜日は、週の他の日よりもっとていねいに、家中を掃除する” の表現があるところからも上記のコレアスの説明に納得がいくであろう。土曜日は週の他の日にはしないような家事をすることが昔からの習慣であったのであろうと推測される。週休二日制の現代の日本にも通じることわざであり、熟語である。どこの家でも土曜日はていねい掃除の日に当てているのではなからうか。

1055. Ni te alborotes ni te enfotes.

すぐにかっとなるのも 自身過剰になるのも よくない

- つまらないことですぐにかっとなるのも、また、あまりにも自信たっぷりに深く考慮せず何かを決断するのは、後で結局は自分が損をするような羽目におちいたり、身を滅ぼすようなことにもなるから気をつけなさいとおしえている。
- “enfotarse” は、スペイン語辞書（スペイン王立アカデミー）によると、アストゥリアス方言で、己自身に過剰な自身を持つ意、コレアス（諺集）によると、勢いをつけて決断することを意味する。
- 怒りについては、こちらにも “怒りは敵と思え” という良いことわざがある。また、何か重要な決断をしなくてはならない時には、“石橋を叩いて渡る” ぐらいの慎重さ

が必要なのではなからうか。

1056. Ni temas toro, ni acosos vaca.

闘牛は怖れるな 乳牛はいじめるな

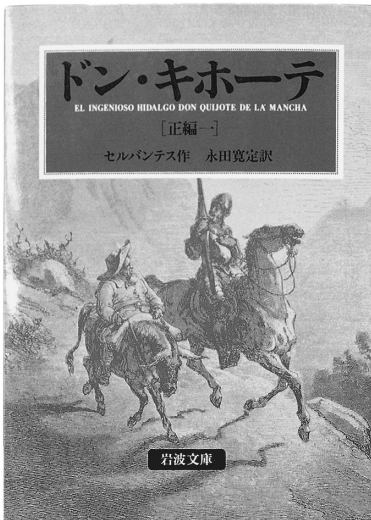
- 強者を怖れるな、また、当たり前顔をして勢力ある者に屈するな、その反対に女とか弱い者を苦しめたり、酷い目に会わせたりしてはいけないとたとえている。(コレアス) 男にとって必要なのは、勇気、度胸があることであり、同時に女とか弱者は困らせないように十分な気くばりもしなければならぬとおしえている。(パロス)
- 勢力があり金がある者には平身低頭し、ホームレスや、身体障害者、老人、子供など力がない弱者にはいじめ、暴力がはびこっているのがこの世の現実である、故に標題のことわざは、人間としてごく当たり前のことを言っているにもかかわらず実現するのはとても難しいような気にさせる。ただし、外に出て働く女性が普通になっている現代では、もはや女は弱者の中に含まれないのではなからうか。少々ニュアンスは異なるが、強者、弱者に対する接し方が共通していることわざとして“大敵と見て恐れず小敵と見て侮らず”がある、これは特に、相手が強敵であっても恐れず、また弱そうに見えても馬鹿にしたり、侮って油断してはならぬと、戦陣に臨む心得をおしえている。しかし、両方のことわざの底には、相手が強いからといってびくびくするな、弱いからといって侮るなという人間にとって大切なおしえが隠されている。

1057. Ni un dedo hace mano, ni una golondrina verano.

一本の指では手にならないように 一羽のつばめでは夏にはならない

- 習慣となるためには、同じ行為の繰り返しが必要であり、また、最終的な判断を下すためには同種のものが豊富にあることが必要であるということ。
- コバルピアスの宝典には、後半の“Una golondrina no haze verano. 一羽のつばめで夏にはならない”のみが記載されている、同宝典によると、これは、スペイン及び、ラテン、ギリシャの格言で、誰でもよく知っているように、燕がいちどきにたくさん来るのを見れば春が到来したんだとわかるが、一羽の燕が先んじてやってきただけでは、春が来たということにはならない。それと同様に、単に一つだけの業績では皆の評判にはならないし、また、一回何かが起こっただけでは、偶然に起こったと思われるだけで、そこから一般的な現象としてとらえることは難しいとしている。

- イリバレンの“格言の背景”にも、後半部分“Una golondrina no hace verano.”のみが収載されている、格言としては前半よりポピュラーであることがわかる。イリバレンによると、春頃になると、アフリカからスペインへ燕がやってくるが、一羽来ただけでは良い季節の到来を推定することができない、それと同じように、一回きりの行いによって、そこから慣例を導き出すことは無理である。
- 類義では“Una golondrina no hace verano, ni una sola virtud bienaventurado. 一羽のつばめて夏にはならない、一回の善行で善人にはならない”(一つの行いで習慣を築くことはできないし、一回きりの行いをした人をその行為によって判断したり、決めつけたりすることはできない—バロス諺集)、“Un solo acto no hace hábito. 一回きりの行いは習慣とはならぬ”, “Un solo golpe no derriba un roble. 一撃ではカシの木を倒せぬ”, “Un tizón solo no arde sin otro. ひとかけらの燃えさしだけでは、燃えない”(繰り返し行為が習慣、伝統を築き、効果を生み出すのである—バロス諺集)などがある。
- 例題1：ドン・キホーテ第一部13章、思い姫をもたぬ遍歴の騎士があるわけにはゆかぬと言うドン・キホーテに旅人が、ある勇敢で高名な騎士がそのような婦人をもったことが一度もないと例をだしていったところ、ドン・キホーテがことわざを引いてこう答える、“- Señor, una golondrina no hace verano. Cuanto más, que yo sé que de secreto estaba ese caballero muy bien enamorado, …いや～、ただ一羽の燕では夏になりませぬて。そのうえ、手前は存じておるが、かの騎士も、ひそかには、すばらしい恋をしとったのじゃ。”(正編一、永田寛定訳)
- 例題2：セレスティーナ第7幕、セレスティーナは自分の利益のために、いやがる娼婦にもう一人男を世話しようと話しをもちかける、ここでは、一という数字の具合の悪さをことわざと自分の創作を混じえてえんえんと述べる、“…Una alma sola ni canta ni llora; un solo acto no hace hábito; ………un manjar solo continuo presto pone hastío; una golondrina no hace verano; un testigo solo no es entera fe; quien sola una ropa tiene, presto la envejece. 人はたった一人でも歌いもしないし、泣きもしないもんだよ。たった一回の行ないでは習慣にはならぬ。たった一種類の料理が、いつまでも続くとすぐにいやになるものさ。たった一羽の燕が飛んできたからといって、夏にはならぬ。また、たった一人の証人では、まるまる信用するわけにはいかぬものよ。着物も着たきり雀では、すぐに古ぼけてしまう。”(魔女セレスティナ、大島正訳)



DON QUIJOTE. Cervantes.
IV CENTENARIO (生誕 400 年)